

第10回「泉大津市オリウム随筆賞」

【佳作】

ピンクのカーディガン

西村 美香・大阪府貝塚市

三十年たった今でも、あの時のピンクのカーディガンのことなら細部まではつきり思い出すことができる。上等なフワフワの毛糸で編まれた、羽のように軽いカーディガンは、手にとっただけでも、掌の上に温かい空気がほんわか積もるようだった。ゆったりとしたラグラン袖はリラックスした雰囲気で、そしてなによりも素敵だったのは、前身ごろに並んだ銀色のボタンだ。控えめに光る外国のコインのようなボタンは、桜の花のように薄いピンク色の毛糸の上で、うっとりするほど上品に見えた。

こんなに気に入ったカーディガンは、後にも先にもなかったのに、それが私の物になることは、ついぞなかった。試しに肩から羽織ってみることさえ、私はしなかったのだ。でも確かに今でも、あのカーディガンは間違いなく、私にとっては一番のお気に入りだ。

私がそのカーディガンと出会ったのは、大学一年生の秋だった。同級生の男の子に、授業が終わったあと、もしよかったら一緒にデパートに行ってくれないかと頼まれたのだ。その日はちょうどアルバイトも無かったので、私は気軽に引き受けた。

デパートに着くと、男の子は婦人服売り場に向かった。お祖母ちゃんへのプレゼントを買いたいから、一緒に選んで欲しいのだという。お祖母ちゃんはその頃、夫であるお祖父ちゃんを亡くしたばかりで、すっかり気を落としてしまっていたから、孫である男の子はプレゼントをあげて元気づけたかったのだ。

もうすぐ寒くなるから、暖かいセーターでも買ってあげたいというので、二人であれこれ見ていると、ベテランっぽい女性の店員さんが声をかけてくれた。そして、私たちがもうすぐ八十歳になるお祖母ちゃんのためのセーターを探しているとわかると、親切にアドバイスをしてくれた。

「それならセーターよりも、少しゆったりした形の、前あきのカーディガンの方が、脱ぎ着がしやすくて喜ばれると思いますよ」

確かにその通りだと、店員さんがお勧めしてくれた、いくつかのカーディガンを、私たちはためつすがめつ眺めた。

「ねえ、あれはどう？ あのマネキンが着ているピンクのカーディガン」

店員さんは、私が目にとめたカーディガンを取ると、目の前にふんわりと広げてくれた。「これは最高級の毛糸で編まれているので、驚くほど軽くて、それにとても暖かいんです。どうぞ手にとってみてください」

手で触れたとたん、私はそのカーディガンの虜になり、男の子に言った。

「こんな綺麗なピンク色なら、きっと気持ちも明るくなるし、絶対にお祖母ちゃんも、この可愛いボタンを気に入ってくれるよ」

最高級というだけあって、それは、今まで店員さんが並べて見せてくれたどの品物よりも、高い値段がついていた。かなりの大金だ。それは男の子がほとんど毎日行っているアルバイト代の、ほぼ三か月分だった。

少し考えたあと、男の子は真剣な顔をして、ピンクのカーディガンを手にとると、「これをください」と言った。

私は、自分を買ってもらったわけでもないのに、まるで天に昇りそうぐらい嬉しくなつて、店員さんと顔を見合わせて笑った。

綺麗に包装されてリボンをかけられたカーディガンと引き換えに、男の子の財布は可哀そうなくらいに、ぺしゃんこになった。

その後、帰省した男の子がカーディガンを渡すと、お祖母ちゃんは涙を流して大喜びで、それからはずっと、まさに肌身離さずだったそうだ。だけど、よほど気持ちが弱っていたのか、それからすぐ、まるでお祖父ちゃんのあとを追うように亡くなってしまった。

お葬式から戻ってくると、男の子は真つ赤に泣きはらした目で、お祖母ちゃんが最後までカーディガンを大切にしてくれていたこと、お棺の中にも入れてほしいと言が残したことを教えてくれた。

男の子は今、私の夫だ。

一緒にカーディガンを買に行った日から、三十年間ずっと、山あり谷ありの人生を二人で過ごしてきた。長い間には色々あったけれど、本当にピンチの時、ギリギリのところでお助かってきたのは、夫のお祖母ちゃんが守ってくれているからだ、私は固く信じている。

ふと何かの拍子に、あの素敵なピンクのカーディガンが、目の端をかすめるような気がする。もちろんただの思い過ぎしなのだけれど、それでも私は、まるで肩に何かを羽織らせてもらったかのように温かい気持ちに包まれる。

もしかすると、私は自分でも知らないところで、あのお氣に入りのピンクのカーディガンを、天国にいる夫のお祖母ちゃんから、そつと着せてもらっているのかもしれない。